
照葉と未苗

辰野さとる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

照葉と未苗

【著者】

辰野せとる

【作者名】

辰野せとる

【あらすじ】

千字前後の百合短編の連作（予定）。照葉てるはと未苗みなえという女の子の、不安だつたり希望だつたりがちらほら見える日常のお話。名言や逸話を拾ってきて、それを軸にした話作りを心がけるとおもいます。

ひとつめ（前書き）

ほのかに百合。女の子が『一緒にいる』ところの重宝を置いた感じです。恋愛ものと友情ものの間で、恋愛寄り？ ぐらいです。

ひとりきり

定期テスト前。

照葉と未苗は、一緒にこたつに入つて問題集を解いている。こたつの温度は少し低め。未苗の家のこたつは小さくて、お互いの体温がほのかに感じられる。

「うー、わたしも照葉ちゃんみたいに勉強できたらなあ」

未苗はぺたん、と机に突つ伏してしまつ。長い間考えているのは苦手だった。

「私になつても仕方ないわよ。例えば、そうね。ガーシュワインとラヴェルの話をしましようか」

「だれ？」

「作曲家。ガーシュワインは独学ですごい作曲家になつたんだけど、やつぱりプロに教えてもらいたいと思つてたの。それで、有名な作曲家だったラヴェルに教えてもらおうとしたんだけど、『あなたはもう一流のガーシュワインなんだから、一流のラヴェルになる必要はないでしょ』って言われたのよ」

ちよつとは未苗の気分が晴れるかな、といつ照葉の期待とは裏腹に、未苗はさらに考え込んでしまう。

「ううん……」

「ちよつとわかりにくかつた？」

「わかつた！ それじゃあ、わたし『照葉ちゃんの恋人』『じゃいけないね！』

「え、あの、どうして……？」

照葉の心に、ふわふわとした綿菓子のような、とらえどころのない不安が浮かぶ。

未苗は照葉にとつて、憧れの女の子だった。元気で、可愛らしくて、純粋で。閉じこもつてしまいがちな照葉と違つて、未苗はどんどん先へと進んでいくことができる。

照葉が一番憧れていたのは未苗のそんな姿であり、恐れているのもそれだった。

心を碎いて紡ぎあげた、なによりも守りたいこの関係。それが、小さなきつかけで変わってしまうような気がして。

「ガーランも、ラヴェルさんも、世界でただひとりきりなんだよ。恋人なら何人でも作れるけど、同じ子はひとりもいない。考えたくないけど……照葉ちゃんの恋人になれる人って、わたしのほかにもいると思う。だけど、『照葉ちゃんの未苗』になれるのはわたしだけだよね」

「……私の恋人は、これからもずっと未苗だけよ」

未苗にとつても、そうだったらしいな。

照葉は寒さに震える手で、こたつの中の未苗の手を握った。繋いだ手を通して、温もりを伝え合つ。

目には見えないけれど、確かに一人は繋がっている。

「えへへ、ありがと」

そんな、冬の日。

てふくわ (福井わ)

「んなんばっかりかよ？」

「んなんばっかりです！」

「たぶん！」

指先から寒さが染み込むよつな冬の朝。

「手、つな」。」

未苗に屈託のない笑顔で見つめられて、照葉は動搖してしまつ。

「へ、うん……こ、よ」

付き合いつ前から、手を繋ぐ事は多かつた。それはとても普通なことで、当たり前の行為だった。

けれど、意識して手を繋いひとつと思つと、ひとつしても上手くいかない。

結局、未苗の手を握ろうとして、照葉の手は空を掴んでしまつ。

「照葉ちゃん、どうしたの？」

「「」めんなさい。私、どうやって手を握つたりいのが、わからなくなつちやつて」

わたし、なんて情けないんだろう。照葉は内氣な自分が嫌になつて、雪に覆われた地面を見下ろした。

知つている場所なのに、雪に覆われているだけで、踏み出すのがこわい。

「んー、きっと考えすぎなんだと思つよ」

「でも、考えないと、怖くて……なにか、間違えてしまつうで」

「ねえ照葉ちゃん、キスの仕方、知つてる？」

「知つてるけど、そんなの、わからなーいわ。したこと、ないし……」

照葉の心臓がはじけそつになつて、顔を真つ赤に染める。

二人は付き合い始めて口が浅い。キスなんてした事がないし、照葉は未苗と一緒に出掛けるだけでも緊張してしまつ。友達よりも遠ざかつたように見えるほど。

けれど、一人の心の距離は付き合いつ前よりずっと近い。

「手を繋ぐのも、キスするのも、そんなに難しいことじやないよ。

でも、考へてもわからないかも。だつて、わたし手の繋ぎ方なんて習つたことないもん」

だからね、と未苗は続ける。

「してみればわかるし、してみないとわからないよー。ほりー。」

未苗は照葉の手をしつかりと握り、笑いかける。

照葉はガラスに触れるような慎重さで、分厚い手袋越しに未苗の手を握り返した。

「ね？ もう握れるでしょ？」

「うん……臆病で、ごめんなさい」

「臆病でもいいよ。そういうのじるも含めて、照葉ちゃんのこと、全部好きだからー。」

ぱらぱらと、小さな花びらのような雪が舞い散る。

「私も、その、未苗のこと……全部好きだから」

照葉は赤くなつた顔をマフラーで半分隠したが、ただでさえ熱くなつていた顔がもつと熱くなつてしまつた。

学校には、まだ着かない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8007z/>

照葉と未苗

2011年12月25日19時59分発行